

## 黙示録3章14-22節 「『十分に足りています』の呪い」

### 1A 真実な万物の源 14

### 2A 主の忠告 15-19

1B 生ぬるさ 15-16

2B 貧困の実態 17-18

3B 愛する方 19

### 3A 主のために戸を開ける者 20-22

1B 主との食事 20

2B 主の御座 21-22

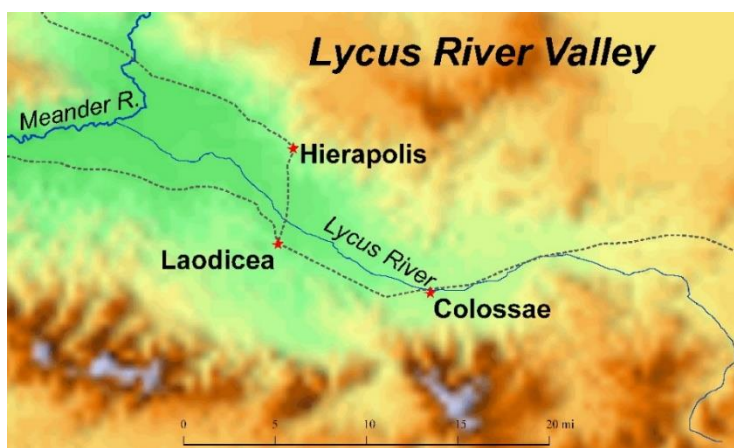
## 本文

黙示録 3 章を開いてください、今晚は、3 章 14 節から読みます。ついに、私たちの黙示録の学びは七つの教会の最後になりました。「ラオディキアの教会」です。(本文を読む。)

ラオディキアの町は、フィラデルフィアから約 65 キロメートル南東に位置する町です。三つの都市が集まっているのですが、コロサイが東に、ヒエラポリスが北にあります。

パウロが宣教旅行でそこを訪ねた記録はありませんが、コロサイ人への手紙で、その隣接する町であったラオディキアの教会の人たちのことも念頭に入れて、書いていたことが分かります。「コロサ 2:1 私が、

あなたがたやラオディキアの人たちのために、そのほか私と直接顔を合わせたことがない人たちのために、どんなに苦闘しているか、知ってほしいと思います。」「4:13-15 私はエパfrasのために証言します。彼はあなたがたのため、またラオディキアとヒエラポリスにいる人々のため、たいへん苦勞しています。14 愛する医者 of ルカ、それにデマスが、あなたがたによろしくとっています。15 どうか、ラオディキアの兄弟たちに、またニンパと彼女の家にある教会に、よろしく伝えてください。」「ヒエラポリスとラオディキアとコロサイは、隣接し合っている三つの町なので、手紙を回覧するようにさせています。そして、ここでのイエス様の、ラオディキアの教会に対する言葉にも、ヒエラポリスとコロサイの町が背景にあります。



ラオディキアは、ギリシアのセレウコス朝アンティオコス二世によって建てられて、妻の名ラオデ

イケにちなんで名づけられました。ダニエル書 11 章には、北のセレウコス朝と南のプトレマイオス朝の戦いが預言されていますが、11 章 6 節に、アンティオコス二世のことが預言されています。

この町はフリュギア地方の南西部にある重要なところですが。メンデルス(Meander)川の支流リュコス(Lycus)川沿いにあり、150 ㎞先のエペソからシリアへの幹線道路やその他の道路が交わる、交通の便が良いところにありました。交通の便利さから、ローマ時代は商業や経済の発展に恵まれ、銀行の中心地でした。産業は羊毛が盛んで、黒紫色の光沢のある柔らかい羊毛が取れたと言われています。遺跡を見ますと、豪華絢爛な寺院や劇場が立ち並んでいたことを伺えます。そしてラオディキアには、有名な医学校があり、そこで知られていたのは目薬でした。もちろん、ギリシア神話の医療の神「アスクレピオス」の神殿もありました。着る物もあるし、目薬もあり、また金もありますが、これらを後でイエス様がこのことを持って彼らを叱責されます。

また、他の地域と同じように、アンティオコス三世が多くのユダヤ人をここに移住させていたので、ユダヤ人が社会の中で地位を得ていました。彼らは、エルサレムの神殿に献金することも許されてきました。そこで、宗教の自由が他の地域に比べれば保障されていました。そしてこの町では迫害も少なかったようでもあります。そのことは、むしろ彼らに霊的な危機をもたらした一原因です。

ラオディキアの町の歴史の中で、有名なのは紀元後 60 年に起こった地震であります。それで町が破壊されたのですが、皇帝ティベリウスからの援助の申し出を受けなかったそうです。「私たちは自分たちで町を再建することができます。」と断っています。それだけ自分でやっていけるという自負を持っていて、事実それだけの富と力を持っていました。ここが、ラオディキアの教会の最大の霊的危機です。それは、「自分だけで何とかやっていける」であります。自分は必要だ、事欠いていることはない、とすることです。この態度を見ると、私は恐ろしくなります。それは日本人の多くがそのような態度だからです。「私は十分足りていますから、結構です。」と言います。自分の内に、必要なものはある。だから外からの助けは必要ないということです。これが、恵みを受け入れることを妨げていて、頑なな心を作っています。

そういうことで、ラオディキアの教会は最も今の時代の教会の霊的危機をよく表しているところですが。すなわち、「物質的に裕福で、便利で、自由も保障されているため、神とイエス様を必要としなくても生きられる教会」ということです。教会なのに、イエス様を締め出してしまう教会です。根本的なところで、信仰の本質を破壊してしまうような要素を持っていたと言えます。

## 1A 真実な万物の源 14

<sup>14</sup> また、ラオディキアにある教会の御使いに書き送れ、『アーメンである方、確かに真実な証人、神による創造の源である方がこう言われる――。

町の名であります、そのままの意味は「人々の支配」とか「人々の義」という意味になります。町の状況をよく表しています。神による支配ではなく、人間中心の支配です。神の義ではなく、人の義、人は良いのだということです。

イエス様がこの教会で現れた姿は、二つあります。一つは、「**アーメンである方、確かに真実な証人**」であるということ、もう一つは、「**神による創造の源**」ということです。

一つ目からお話しします。アーメンというのは、ヘブル語で「まことに、真実に」という意味です。旧約聖書では、ユダヤ人が祈りに応答したり、主の語りかけに対して応答する時に使われ、新約聖書でも、同じように使われています。「然り」と訳されたりしますね。「そのとおりです」という意味です。けれども、民が神の言われていること、神の真実に応答する時に使われるだけでなく、神ご自身が真実な方であることに使われます。イザヤ書 65 章 16 節に、「この地で祝福される者はまことの神によって祝福され、この地で誓う者はまことの神によって誓う。」とあります。ここの「まことの神」が、「アーメンにある神」となっています。そしてイエス様ご自身が、「まことに、まことに、あなたがたに言います」と言われた時には、「アーメン、アーメン、わたしはあなたがたに言います。」となっています。つまり、イエス様は「アーメンの神としてわたしは語ります」と言われているわけです。そして、「**確かに真実な証人**」であります、これは 1 章 5 節にも、出てきた名でした。つまりイエス様はここで、ご自身をアーメンなる父なる神と一つであり、そしてそのことを忠実に証した者ということでもあります。

なぜイエス様が、ラオディキアに対してこのような形で現れたかと言いますと、彼らが神の真実に触れようとしなないという問題があったからです。自分の考えていること、自分の感じていることを優先して、心の中で神の真実を受け入れていないのです。真実また真理に触れるならば、そこで私たちの心は奮い立ち、燃やされるようになって清められ、強い反応、強い応答が生まれるはずなのです。それが、心が鈍くなっており真理を聞いていないという問題があるからです。

そして、「**神による創造の源**」であります、これは良い訳です。全ての被造物の源になっておられる方ということであり、創造主ご自身であることを示しています。ラオディキアの人たちも読むように勧められていたコロサイ人への手紙で、パウロはこう話しています。「1:16 なぜなら、天と地にあるすべてのものは、見えるものも見えないものも、王座であれ主権であれ、支配であれ権威であれ、御子にあって造られたからです。万物は御子によって造られ、御子のために造られました。」どうして、こんなことを主は語っておられるのか？そう、全ては主によって与えられているということをラオディキアの人たちが拒んでしまったからです。すべての富や知恵、恵みというものは、神からの賜物であり、神とキリストこそが全ての源です。この方に立ち返ることこそが、生きる道であるのに、それらの豊かな賜物の中に溺れて、その源を心から退けているからに他なりません。

## 2A 主の忠告 15-19

### 1B 生ぬるさ 15-16

<sup>15</sup> わたしはあなたの行いを知っている。あなたは冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。<sup>16</sup> そのように、あなたは生ぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしは口からあなたを吐き出す。

ラオディキアはサルデスと並んで、称賛する言葉はなく、叱責する言葉のみを主は語られました。ここでは、これまでの教会の中である意味、最も深刻な問題を取り上げておられます。「冷たくもなく、熱くもない」ということです。

ラオディキアの町は、二つの町、ヒエラポリスとコロサイの間にあることは、先にお話した通りです。ヒエラポリスは、温泉でも有名です。今も、温泉が流れています。パムツカレというトルコ語の名称で有名ですが、「綿の城」という意味です。温泉からの石灰が沈殿して、純白の段々畑のような景観になっています。まるで雪が降って、ゲレンデのようになっています。そして、コロサイには、カドムス山がすぐそばにあり、そこからの雪解け水がコロサイを通過して流れています。

ラオディキアは、その二つの町からの熱い水と、冷たい水の両方を、水道管によって取り入れていました。水道管の遺跡がたくさん発掘されていますが、その中にカルシウム類が分厚く沈殿しているのが、ヒエラポリスからのものであることが分かります。土器で造られた水道管で、熱さを保つことも、冷たさを保つこともできたそうです。



当時の人々の考え方は次のようなものです。熱い水は、温泉ですから、癒しをもたらします。この熱い水を飲むと、体にも良いと考えられていました。そして、冷たい水は、とつてもさっぱりします。新鮮になれます。しかし、そんな中でも、生ぬるい水は、ラオディキアの人々にとって唾棄すべきものでした。熱いのであれば癒し、冷たいのであればリフレッシュされますが、生ぬるいのは毒があるというようにみなしていたのです。だから、文字通り吐き出していたそうです。これが、イエス様が語られていたことの背景です。あなたがたが、生ぬるくなっているのだ。熱ければ癒されるし、冷たければ新鮮になるし、けれども、あなたは吐き出されるような生ぬるさがある、と言われました。

これは、「アーメンである方、確かで真実な証人」として現れたイエス様に応答していない状態です。「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」として応答していない状態です。自分の生活に満足している状態です。もっと簡単に言うと、「問題のないクリスチャン」です。問題がないと感じていない



人が、最も問題なのです！イエス様の真実に触れれば、その御言葉に触れれば、必ず自分は反応するはずで。ところが、自分に満足しているので、飢え渴きがないので、反応もしないのです。

反発することと、無関心であることは、どちらが、心が頑なでしょうか？反発すること、反対すること、迫害することのほうが酷いと思われるでしょうか？いいえ、必ずしもそうではありません。パウロは、牛の突き棒を突いているとイエス様から言われました。迫害していたのは、心の奥底で、この方が真実であることを知っていたからです。それに反発していたのです。パウロのように、迫害者が悔い改めに導かれることがあります。しかし、無関心はさらなる真理への敵です。バビロンの姿が黙示録 18 章に出て来ますが、そこでは、商業によって潤っている都の姿があります。そこに対して、主が一日で滅ぼすという裁きを行われます。そうでもしなければ、気づかない心の鈍さがあったのです。あるいは、心が、ガラスのような堅さであれば割れるけれども、ゴムのような軟弱さがあれば、何をやっても壊れないというのと似ています。もしゴムのような強情さであれば、主はそれ自体を火の中で燃やしてしまうのでしょうか。それが主の言われている、「生ぬるさ」です。

## 2B 貧困の実態 17-18

<sup>17</sup> あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、足りないものは何もないと言っているが、実はみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸であることが分かっていない。

ラオディキアの町において、地震が起こった後に、皇帝からの援助を断った話を思い出してください。「私たちだけでできますから、助けは要りません。」という態度です。それに象徴されるような態度がここに書かれています。「私は自分で何とかやっていける財産もありますから。」という、自存心という態度です。自分で存続できるということです。だから、祈りも必要としなくなります。祈っても、形式だけのものとなります。主からの導き、御霊の助けは要らない、となります。そこでイエス様は、はっきりと彼らの自己評価とご自身の評価を対比させています。彼らは、自分たちは富んでいる、欠けたものはないと言っているのですが、貧しくて、哀れで、盲目で、裸なのだ、と強く責めておられます。スミルナに対するイエス様の慰めの言葉と正反対です。「2:9a わたしは、あなたの苦難と貧しさを知っている。だが、あなたは富んでいるのだ。」と言われました。

<sup>18</sup> わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精錬された金をわたしから買い、あなたの裸の恥をあらわにしないために着る白い衣を買い、目が見えるようになるために目に塗る目薬を買いなさい。

自分たちが惨めで、哀れで、貧しく、盲目、裸だと悟ることができれば、イエス様の恵みを初めて受け入れることができます。そうでなければ、受け入れる必要性を感じません。けれども、彼らの状態を明らかにされてから、恵みを受けなさいと忠告しておられます。

まず、「豊かな者となるために、火で精錬された金をわたしから買い」なさいと言われます。ラオディキアは、金融業が盛んでした。それで金貨も豊かにあったのですが、イエスご自身こそが、尊いお方です。「I ペテ 1:7 試練で試されたあなたがたの信仰は、火で精錬されてもなお朽ちていく金よりも高価であり、イエス・キリストが現れるとき、称賛と栄光と誉れをもたらします。」

次に、「あなたの裸の恥をあらわにしないために着る白い衣を買い」なさいと言われます。ライディキアは黒い羊毛の着物がブランド物の発祥地なのですが、キリストの血によって清められた白い衣を着なさいと勧められます。裸になっていること、自分のそのままの姿が露わにされたら、それにしがって裁かれてしまいます。キリストの義という着物を身に着ける必要があります。

そして、「目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。」と言われますが、目薬がこの町は有名でしたが、霊的に開かれるための目薬をわたしから買いなさいということです。パウロが祈りました。「エペソ 1:18-19 また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しにより与えられる望みがどのようなものか、聖徒たちが受け継ぐものがどれほど栄光に富んだものか、19 また、神の大能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力が、どれほど偉大なものであるかを、知ることができますように。」

### 3B 愛する方 19

<sup>19</sup> わたしは愛する者をみな、叱ったり懲らしめたりする。だから熱心になって悔い改めなさい。

ここが大事ですね、イエス様がなぜこのように叱っておられるのか？懲らしめておられるのか？それは、「愛している」からです。「ヘブル 12:5-6 そして、あなたがたに向かって子どもたちに対するように語られた、この励ましのことばを忘れていません。「わが子よ、主の訓練を軽んじてはならない。主に叱られて気落ちしてはならない。6 主はその愛する者を訓練し、受け入れるすべての子に、むちを加えられるのだから。」マザー・テレサが言った言葉で有名なのは、「愛の反対は憎しみではない 無関心だ」ということです。先ほど触れた、無関心な姿ほど愛と程遠いものではありません。

真実な愛は、真実を語ります。イエス様が、ご自身が十字架に向かうことを弟子たちに語られて、ペテロがそれを諫めた時に、「下がれ、サタン。(マタイ 16:23)」と言われたその言葉です。ペテロは良かれと思っていったのでしょ、しかし心は高慢になっていました。イエス様は、「あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」と続けて言われました。このように、イエス様の愛は、まっすぐな愛です。そして、悔い改めます。ただ悔い改めるのではなく、「熱心になって」悔い改めます。ラオディキアの人たちは、ここが問題でした。心が伴っていないのです。自分に満足してしまっているの、何かをしても口先だけになってしまうのです。したがって、心を込めて、思い直さなさいと命じられています。

### 3A 主のために戸を開ける者 20-22

#### 1B 主との食事 20

<sup>20</sup> 見よ、わたしは戸の外に立ってたたいている。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその人のところに入って彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

ここからが回復の約束です。まず、「わたしは戸の外に立ってたたいている」と言われています。つまり、ラオディキアの教会においては既にイエス様がおられなかった、ということです。エペソにおいては、イエス様がその燭台を取り上げると言われて警告しておられましたが、彼らは既にその燭台が取られていたのです。物質的には満たされていたけれども、そこにイエス様、万物の根源なるかた、真実な方がおられなかったのです。そして、「立ってたたいている」と言われていることに注意してください。イエス様が離れたというよりも、彼らがイエス様を締め出したのです。イエス様のほうは、その中に入りたいと願っておられます。

そして、「だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら」と言われます。だれでも、というのがすばらしいですね。どんなにイエス様から離れても、誰でも主のもとに戻ることができるのです。そして、「わたしの声を聞いて」とあるように、主の声を聞いているのかどうか？が大事であります。私たちが、この方にひれ伏し、心を開くということが大事で、そうすれば御声が聞こえます。そして、「戸を開けるなら」であります。自分の主体的な行為が必要です。求めなさい、見付けなさい、捜しなさい、と主が言われました。私たちは、自然発生的に主が何かをしてくださると思っていますが、主は、私たちが求める中で、そのへりくだった心と共に働いてくださいます。

そして、「わたしはその人のところに入って彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする」と言われます。当時は、共に食事をする事は、最も親密なこととされていました。同じ食べ物が互いに体内に入ります。それで、互いに一つになっているという事を象徴的に表していたのです。ですから、イエス様が親密に交わってくださるということを表しています。ダビデは、この主との交わりを、食卓に招かれた客として描いています。「詩篇 23:5 私の敵をよそにあなたは私の前に食卓を整え頭に香油を注いでくださいます。私の杯はあふれています。」敵前でさえ、主が共におられ、自分を祝福してくださるというそのご臨在であります。

#### 2B 主の御座 21-22

<sup>21</sup> 勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせる。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。

これは、御国における約束です。千年間のキリストの統治の時に、主が約束しておられたことです。「20:4 また私は多くの座を見た。それらの上に座っている者たちがいて、彼らにはさばきを行う権威が与えられた。また私は、イエスの証しと神のこぼのゆえに首をはねられた人々のたましい

を見た。彼らは獣もその像も拝まず、額にも手にも獣の刻印を受けていなかった。彼らは生き返って、キリストとともに千年の間、王として治めた。」この初めの部分、「また私は多くの座を見た。それらの上に座っている者たちがいて、彼らにはさばきを行う権威が与えられた。」が、教会に与えられている約束であります。主が、死にまで忠実であったゆえに、神が甦らせてくださり、天に引き上げ、そしてご自分の右の座に着かせました。同じように、イエス様が私たちをご自分の近くに引き寄せ、与えられている座に着かせてくださいます。そして、地上に主が戻られて神の国を立てられる時、私たちも主と共に統治するのです。

この大きな恵みについて、20 節に書かれている共に食事をするということに、実はつながっています。メフィボシェテのことを思い出してください。ヨナタンの息子です。ダビデがヨナタンと契約を結んでいました。彼に恵みを施し、その子孫を滅ぼすことがないようにという願いをダビデは聞きました。そこでメフィボシェテは、自分は犬のように卑しい者であるのに、ダビデと同じテーブルで食事をする事となったのです。ダビデの子であるキリストの食事にあずかるというのは、こういうことです。王の王であるイエス様、この方の食事の席に着き、まるで王と同じようにみなされる、大きな恵みにあずかっています。いかがでしょうか？ラオディキアの富など、この栄光の富に比べれば、陳腐な物、ちり芥にしか過ぎません。

22 耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。』』

ラオディキアのみならず、全教会に御霊によって語ってくださったことです。私たちは、全ての教会において、御霊による語りかけを受けました。第一に、「初めの愛から離れてしまった教会」を見ました。第二に、「迫害を受けている教会」を見ました。そして第三に、「妥協してしまっている教会」を見ました。第四は、「なすがままにさせていた教会」です。第五は、「無気力、無感覚な教会」です。第六は、「わずかな力でも、忠実な教会」でありました。そして第七は、「神、キリストを必要としない満足した教会」です。

これらが、私たちの教会にも全て語られていて、そして主が来られることを待ち望んでいます。4章以降は、主によって引き上げられた後の出来事が始まります。